クテシアス著、阿部拓児訳『ペルシア史／インド誌』

一般にはあまり馴染みがないかもしれないが、クテシアスという人は、ギリシア人でありながらオリエント世界をその内側から観察しえた稀有な人物であり、彼の『ペルシア史』は、アケメネス朝の歴史に関する主要な、時期によっては唯一の史料である。しかし脚色が多く信用ならないとの評価が専らで、歴史家の真剣な考察の対象となることは少なかった。ところが近年、クテシアス再評価の動きが進んでいる。詩や小説などの文学ジャンルとの類比によって、狭義の歴史学の範疇に収まらない要素を積極的に評価する方向に変わってきたのである。

本書は、このクテシアス作品群の全訳として『西洋古典叢書』シリーズから刊行されたもので、訳者の阿部氏は、日本で唯一クテシアス研究に取り組んできた歴史学者である。以下ではまず、クテシアスの経歴とその作品の伝存状況を概観したうえで、内容の紹介に移ろう。

クテシアスは小アジア南西部のギリシア都市クニドスの出身で、前四〇〇年前後の一時期、侍医としてペルシア宮廷に仕え、『ペルシア史』をはじめとする諸作品をギリシア語で執筆した。不幸にして原作の大半は散逸してしまったが、古代・中世を通じてよく読まれたため、他の著述家による言及から、その大略が復元されている。このような史料は「断片史料」と呼ばれ、「証言」と「断片」からなる独特の二部編成をとるが、これがそのまま本書の構成となっている。

冒頭に置かれる「証言」は、後代の作家らが残したクテシアスの出自に関わる記述群であり、先に述べた彼の経歴も、これらを根拠に推定されている。「証言」には、作品自体に対する後世の評価も含まれるため、これを読めば、クテシアス作品の「受容史」を通観することができる。

これに対して、作品の内容自体を伝えるのが、後に続く「断片」である。その第一、全二三巻からなる大著『ペルシア史』は、アッシリア、メディア史を前史とし、彼が同時代人として目撃した時点までのペルシア帝国史を扱う。ここに見えるアッシリア、メディア、ペルシアという三大帝国継起の図式は、その後の西洋世界におけるオリエント史叙述の枠組みを決定するものであった。

「断片」の二つ目『インド誌』は、「インド」（現在のパキスタンに相当）の地理、風俗を論じた民族学的著作である。この作品には「犬頭人」や「一角獣」といった一見荒唐無稽な存在が数多く登場するが、訳者は、当地の気候や動植物相について要を得た註を付すことで、これらの記述が生み出された背景を丹念に洗い出している。

「断片」の最後に一括されている「その他の作品」の中には、クテシアスの医師と

しての活動を窺わせる記述も含まれ、彼の多面的な著述活動の一端を垣間見せてくれる。

本書巻末には、訳者のこれまでの研究成果を凝縮した「解説」が付されている。「断片史料」の特質から、各作品の概要、後世への影響に至るまで、論点は多岐にわたるが、中でも特筆すべきは、ヘロドトスに始まるオリエント史叙述の系譜にクテシアスを位置づけた点である。一般にヨーロッパ史学史を論じる際には、ヘロドトスからトゥキュディデスへとその発展を辿るのが定説となっているが、これに対してヘロドトスからクテシアスへと繋がる別の系譜を想定することは、ギリシアにおける歴史叙述の展開を複線的に捉える道を拓く。

近年、クテシアス作品群の文学的側面が注目を集めていることも踏まえるなら、本書は、歴史と文学との関係を巡る議論にも有益な示唆を与えるものであろう。

（四六変上製　三五〇頁　二〇一九年三月
京都大学学術出版会　税別三六〇〇円）

（大野普希　京都大学大学院文学研究科
修士課程）